

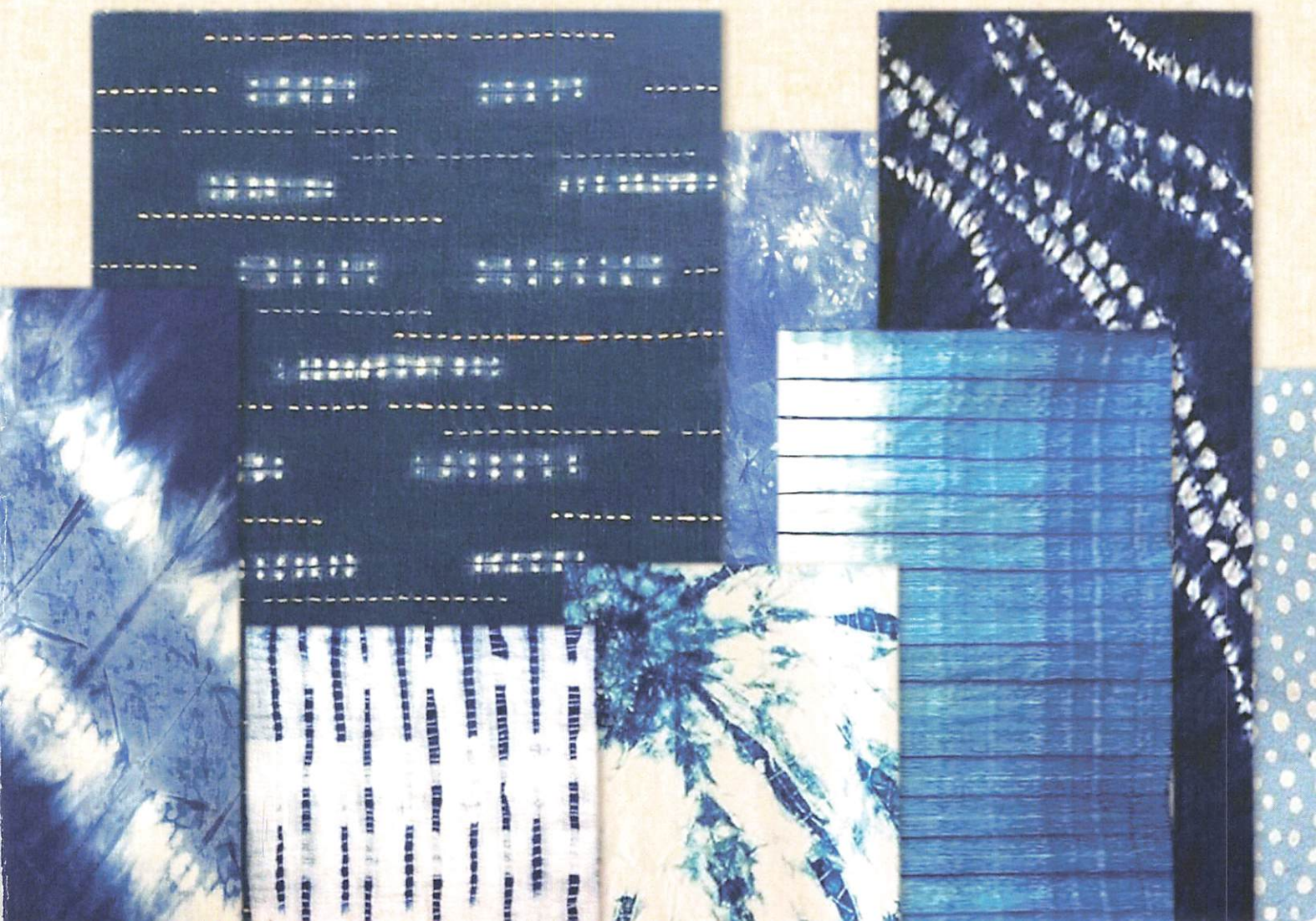


小学校4年 社会（県の学習）

# 受けつがれる伝統・文化と 先人のはたらき

（徳島県の阿波藍）

文教大学 教育学部社会専修





## はじめに

小学校社会科の地域学習では、子どもたちが生活する場を通して自らの足元を見つめ、社会のありかたを考えます。その際に、各自治体が学習指導要領に沿って地域教材を編纂した副読本を用いて学習が行われます。小学校教員を退職された方から、「昔は社会科を専門とするベテラン教師が、放課後や休日などに若手の先生に声をかけて旧跡の巡検や地域調査などを行い、そのなかで地域教材を活用する力を身に付けた。しかし、今はそのような先輩教師がいなくなり、授業活用のために地域教材を発掘・開発する知識や技能を身に付ける機会がなくなった」という話を数年前にうかがいました。この事態には、現在、教員の仕事が多忙で、自身の足で地域を歩き調査する時間的な余裕がないという現実も影響しています。

本学の社会専修は、社会科を専門として将来、教員をめざす学生たちの学びの場です。こうした学生たちに、地域教材を発掘・開発する力を持って学校現場に立ってもらいたい。そのような意図から、2018年8月27日から9月1日の期間、ゼミ学生11名で徳島県北島町を中心に、隣接する藍住町・松茂町において「阿波藍」をテーマとした地域調査を行い、副読本として教材化を試みたものが本冊子となります。「阿波藍」を教材として、地域の歴史学習である小学4年社会「県内の伝統や文化、先人の働き」（県内の文化財や年中行事、地域の発展に尽くした先人）の単元について、北島町の子どもを対象に学習させる場合、どのような内容構成が必要かという課題設定のもとで、本冊子（副読本）の作成を行いました。

単元は大きく四つの内容から構成されています。①単元の冒頭部は、北島町の子どもたちが社会科見学で訪問する藍住町歴史館「藍の館」において、学芸員との連携のもとに体験学習・調べ学習を実施するという設定になっています（2～8頁）。さらに、見学実施後、教室内での学習として、以下の内容を設けました。②阿波藍の特産化をもたらした自然的要因として吉野川との関わり（先人による治水事業を含む）、社会的要因として他地域との結びつき、③特産化した藍の生産・流通を担った人たちが、現在へと伝わる地域の文化を発展させたこと、④伝統工芸・伝統産業として現在の阿波藍が抱える課題と、それを克服していかに受け継いでいくかを、今後の「新たな活用」という展望において考察する。

これら①から④の内容構成をとる上での留意したことは、まず第一に、小中学校の社会科学習では、地域の博物館・資料館の活用や連携を図り、子どもたちが実際にそこへ出かけて体験学習や調べ学習をすることが求められています。その際に、社会科見学と教室の授業を単元内の学習として連動させて展開することに留意しました。第二に、地域を自己完結させずに、他地域との関係性の上で自らの地域が展開してきた、また現在も展開していることを考察させる。第三に、伝統や生活文化に関する歴史的な社会事象を、私たちが生きる現在の社会との関わりにおいて捉えさせること。第四に、これらの授業構想や展開を進める上で、専門性を有する学芸員との連携を図ること。以上、四つの留意点を踏まえて、本冊子の内容構成を進めました。

特に第四の点に関しては、今回、北島町立図書館学芸員の原多賀子氏、北島町役場の大西徹氏をはじめとする北島町関係者より調査における全面的な協力をいただきました。また、藍住町教育委員会の重見高博氏には藍住町歴史館の活用や資料閲覧に関してご協力いただきました。また、公益社団法人三木文庫、松茂町歴史民俗資料館、徳島県立文書館の諸機関において、学芸員・職員の方々から資料閲覧や展示・所蔵品の教材化に関する学生への助言・指導をいただきました。さらに、北島町住民の方々や、伝統的な藍染めを継承する竹内良子氏、藍師の佐藤昭人氏、大谷焼窯元の大内義浩氏をはじめ、阿波藍にたずさわるの方々より聞き取り調査において大変お世話になりました。ここに改めてご協力いただいた皆様に感謝申し上げます。

本冊子は、北島町の小学4年を対象とした社会科単元「県内の伝統や文化、先人の働き」に関する副読本の試案であり、別冊子として今後、実際の授業実践を想定した教材研究や学習指導案、調べ学習用ワークシートなどを作成し提案していく予定です。今回は直接に学校現場との協働はできませんでしたが、今後、教壇に立って子どもたちの指導にあたっている先生方からご意見・ご指導をいただきながら、学校現場で実践可能な授業研究を進めていく予定です。子どもたちの地域の歴史学習の充実として、少しでも授業活用の参考としていただければ幸いです。



## 小学校4年 社会(県の学習)

### 受けつがれる伝統・文化と先人のはたらき (徳島県の阿波藍)

#### 目次

		ページ
	<small>あいぞ たいけん</small> 藍染めを体験してみよう！ (社会科見学 1)	2
1	<small>そ</small> 染めのようすをのぞいてみよう (社会科見学 2)	4
2	<small>あい</small> 藍はどのようにしてつくられるの？ (社会科見学 3)	6
3	<small>よしのがわ</small> 吉野川のめぐみ - 昔と今 -	8
4	<small>よしのがわ ずい</small> 吉野川のこう水とわたしたちのくらし	10
5	<small>にいみかじろう</small> 地いきの発てんにつくした新見嘉次郎	12
6	<small>はこ あい</small> 全国へ運ばれた藍	14
7	<small>あいぞ おりもの</small> 各地に生まれた藍染めの織物	16
8	<small>あいしょうにん</small> 藍商人と地いき文化のつながり	18
9	<small>でんとう にんぎょうじょうるり あわおど</small> 受けつがれる伝統文化 - 人形浄瑠璃・阿波踊り -	20
10	<small>あわあい かだい</small> 阿波藍のかかえる課題	22
11	<small>あわあい かつよう</small> 阿波藍の新たな活用	24



# あいぞ 藍染め

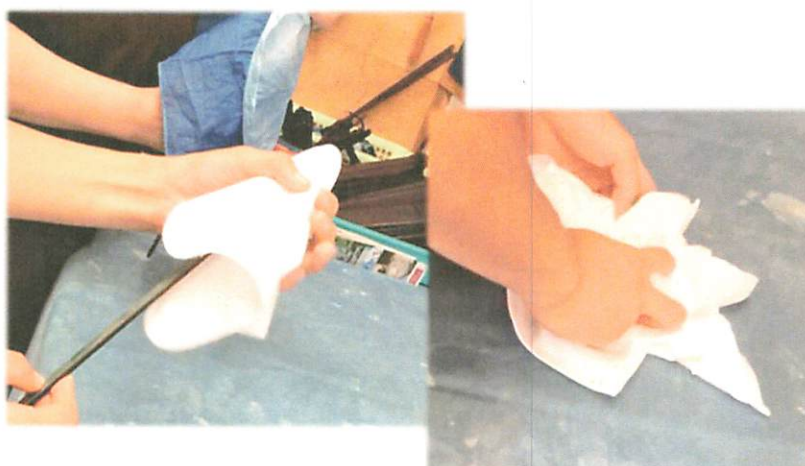
(社会科見学 1「藍の館」)

## たいけん を体験してみよう!



あいずみちよう 藍住町歴史館「藍の館」で実さいに藍染め  
をやってみましょう。

### ① もようを決める



染めるものを、折ったり棒にはさんだりしているよ。どんなもようになるのかな? どんな色になるかな?

### ② 染色液につける

つける→ 引き上げるをくり返して...



ロープ... 染める... 染める...

### 【観察 ①】

- ・ 染色液はどのような色をしているか、どのようなにおいがするか。
- ・ どのような生地きじぬのの布そに染めるのか。



### ③ 染めたものを引き上げる



指やつめにも色が付いている！  
藍はしっかり染まるものなのか  
もしれないね！



### ④ あらう

水に色がつかないくらい  
まであらう！



### ⑤ かわかす



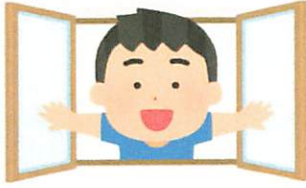
しっかりかわかして…  
できた～！いい色！！



#### 【観察 ②】

- ・ 染色液には、どれくらいの時間、また何回つけるのか。
- ・ 染色液から引き上げた時の布は、どのような色をしているか。
- ・ 布を洗ってかわかすとどのような色になるか。





あい  
藍は、どのようにしてきれいな色やもようになるのだ  
ろう。染師さんの藍染めに対する思いを知ろう。

## (1) 藍染めのやり方



▲ 手順①



▲ 手順②



▲ 手順③

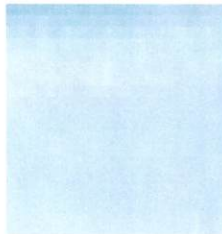
### 【染めの手順】

- ① 染めたいものを染料のなかに3~5分ほどひたし、ていねいに手でもみこむ。
- ② 染料から引き上げて空気にふれさせると、きれいな藍色に染まる。  
※好みの色になるまで、①と②をくり返す。
- ③ よく水あらいをして、かわかす。

### 【色の変化】

ひたす回数が多いほど、こい色に染まります。

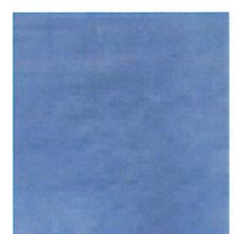
1回目



2回目



3回目



### コラム

藍と木綿はとても仲良し!

④ 綿花 ▶

今から400年ほど前、木綿が人びとの間で注目され、原料の綿花が日本で栽培されるようになりました。木綿はきれいな藍色に染まります。人びとの間に藍染めのふだん着が広まりました。





## (2) 藍建て

### 【藍建ての手順】

- ①高さが1 mほどの藍がめに、藍の葉をはっこうさせたすくもと、あくや石灰、日本酒などを入れる。
- ②ゆっくりとかきまぜ、はっこうさせる。  
※どくとくなくにおいを出しながらはっこうする。
- ③ ①と②をくり返し行い、量をふやしていく。
- ④藍建てを始めて1週間たつと、「藍の華」とよばれるあわが立ち、染められるようになる。



▲ ⑤ 藍建ての様子



▲ ⑥ 藍の華

## (3) 阿波藍の染師・竹内良子さんの話

わたしは、ぎりの母に、古くから受けつがれてきた藍染めの方法を教  
わりました。阿波藍の色は本当にきれいなもので、染めている時はいつも、  
どのような色やもようになるのかワクワクしながら染めています。合成染  
料にはない阿波藍の色をみなさんに知ってもらうために、わたしは阿波  
藍を使って染め続けます。それが、染師としての使命だと思っています。



⑦ 竹内さんの藍染め作品 ▶





藍からどのようにして染料をつくるのだろうか。

### コラム 藍の種類

藍色の色素をふくむ植物は、世界中にたくさんあります。タデアイのほかにも、インドを中心に栽培されているインド藍、九州南部や沖縄にみられる琉球藍、日本全土や中国などには山藍などがあります。

## (1) 「藍」って何？

藍とは、藍色の色素（インディゴ）をふくんだ染料となる植物のことです。日本では、主に**タデアイ**というタデ科の植物から作られています。

全国的に広く生育し、成長に多くの水分や栄養分を必要とします。徳島県は、藍生産量が全国一位です。

藍のくわしい栽培方法は、わたしたちに聞いてね！



がくげいん  
学芸員さん



▲ ① タデアイ

## (2) 藍ができるまで

- ① 3月上旬に種をまき、成長とともに間引きする。
- ② 苗が20cmほどに成長すると、大きな畑にうつし（定植）、十分な水と肥料をあたえて育てる。
- ③ 梅雨が明けた6月下旬から7月上旬、50cmほどに育った藍をかり取る（一番がり）。
- ④ かり取った藍を日に当ててかわかし、葉とくきにわける（藍こなし）。
- ⑤ 8月中旬、再び成長した藍を刈り取り、④を行う（二番がり）。
- ⑥ 葉をよくかわかし、ふくろに入れてほかんする。



▲ ② 間引きのようす



▲ ③ 藍こなしのようす



### (3) すくもの加工かこう

藍あいの葉はのままでは、藍色そに染めることはできません。  
葉はをはっこうさせて、すくもすくもにする必要があります。

- ① 9月上旬じゅうじゆん、藍の葉はを寝床ねどこ（土間の作業場）に出  
し、水をかけてはっこうさせる（ねかせこみ）。
- ② 4、5日ごとに切り返しや通しどまという作業を  
行い、ムラなくはっこうさせる。  
※葉は70度近い高温たかぬになり、アンモニアの  
強つよいにおいがする。
- ③ 気温きんが下がる10月中旬ちゆうぐんごろから、一定の温度  
ではっこうさせるために、むしろむしろをかける。

このようにして作られたすくもは、かますとい  
うふくろにつめられ、全国の藍染め職人あいぞ しよくにん こうや（紺屋）  
のもとへ運ばれて行きます。

高温たかぬの中、切り返しの作業は、  
20回くらい行うそうです！



### (4) すくもを作る藍師あいし・佐藤昭人さとらあきとさんのお話

わたしは子どものころから、祖父そふや父からの意思を  
受けつぎ、藍さいばいの栽培とすくも作りを行ってきました。特に  
すくも作りは、体力たいりきのいる仕事です。こまかい質しつの管理かんり  
や、温度・湿度しつど ちゆうせつの調節などの作業もあります。それでも  
昔むかしからの技術ぎじゆつを受けつぐ藍師あいしであることに、ほこりをも  
って続つづけています。



▲ ④ すくも作りの様子



▲ ⑤ すくも



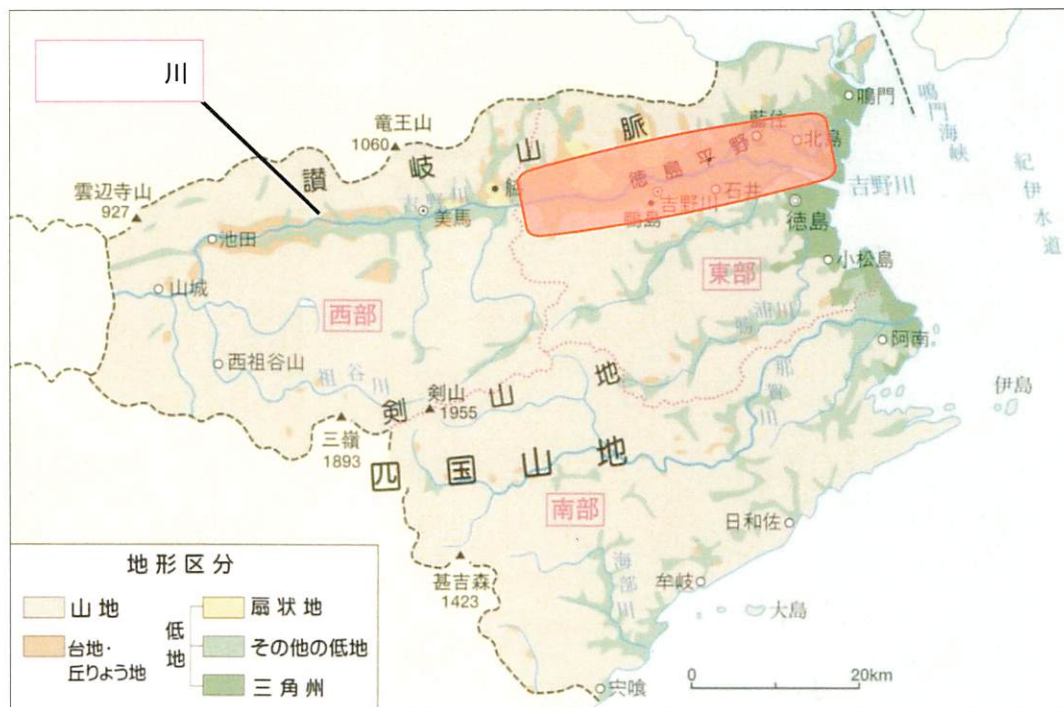
▲ ⑥ かます



よしのがわ  
吉野川とわたしたちの生活は、どのようにかかわっているのだろうか。



▲ ① 藍の畑



▲ ② 徳島県の地形と藍の栽培がさかんであった地いき



▲ ③ 吉野川上流部の祖谷地方 (『風そよぐ—平家・徳島落人伝説』より)



▲ ④ 吉野川下流のようす

### (1) 吉野川の上流のようす

よしのがわ じょうりゅう  
吉野川の上流部には、たくさんの山があります。山にある木から落ちた葉は、土の栄養分になります。そのため川の上流部の土には、たくさんの栄養分がふくまれています。徳島県では、栄養豊富な土が生み出した、ゆたかな森林を生かして、古くから林業がいとなまれました。

### (2) 吉野川の下流のようす

吉野川の下流部には、平らな土地が広がっているため、農業をいとなむことができます。一方で下流部では、たびたびこう水が発生し、人々をなやませしてきました。図②の [red box] は、かつて藍の栽培がさかんだった地いきです。栄養豊富な土が、藍の栽培にてきして



げんざい  
 (3) 吉野川と現在の人々の暮らし



▲ 水田



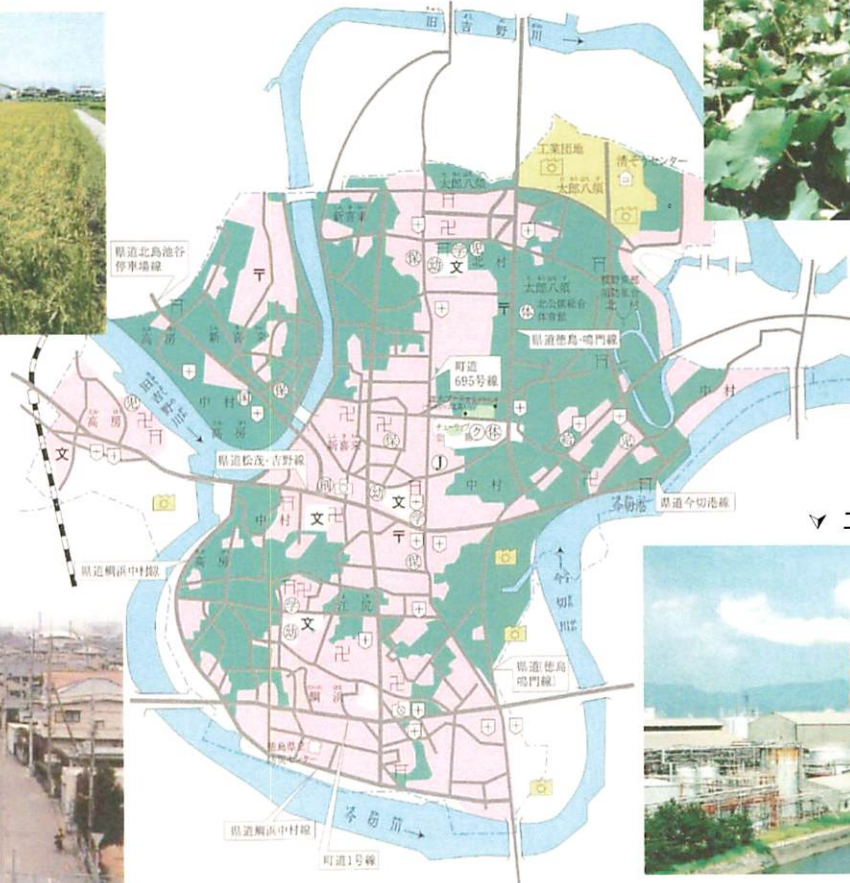
▲ レンコン畑



田畑・果樹園



▼ 住宅地



住宅地

工場用地

▼ 工場



▲ ⑤ 北島町の土地利用 (『わたしたちの北島町』より)

いるため、良い品質の藍をとることができました。

旧吉野川と今切川にはさまれた北島町でも、かつては藍の栽培が行われていました。現在はどうでしょうか。図⑤で、北島町の土地利用のようすをみてみましょう。旧吉野川の近くや、町の北や東の方には、田や畑が広がっています。ここでは、米やレンコン、さつまいもなどが作られています。町の南の方にも、以前は田畑がありましたが、現在は住宅地にかわり、家が建ちならんでいます。また、川の近くにはたくさんの工場があります。

北島町では、吉野川から旧吉野川へ流れこんだ水を使っています。田畑や家、工場では、水がどのように利用されているか考えてみましょう。

昔は、吉野川のめぐみを生かして人や物を運んだり、藍が栽培されていました。現在は、吉野川の水を農業や工業、生活用水として利用しています。時代はかわっても、吉野川はわたしたちの生活と深くかかわっているのです。



よしのがわ  
吉野川は、私たちの  
生活にどのような  
えいきょう  
影響をもたらして  
きたのだろうか。

高さ  
4.19m



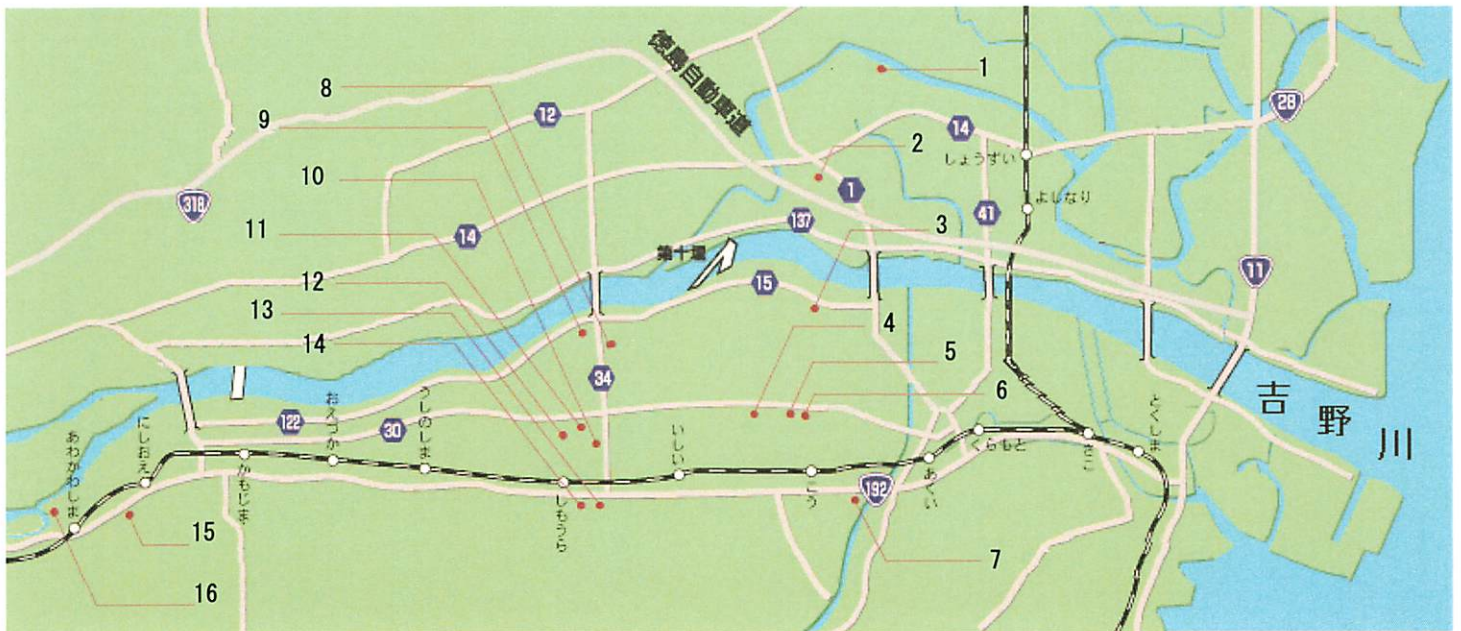
### (1) 吉野川のこう水

写真①は、今からおよそ200年前(1811年)に建てられた<sup>たかじぞう</sup>高地蔵で、高さが4.19mもあります。<sup>だいざ</sup>台座の高さは、何をあらわしているのでしょうか。それはこう水<sup>ずい</sup>によって水につかった深さです。吉野川ではこう水<sup>ずい</sup>によって被害<sup>ひがい</sup>が出ると、人びとが願いをこめて、高地蔵<sup>た</sup>を建てていました。高ければ高いほど、被害<sup>ひがい</sup>が大きかったことがわかり、人びとの安全への願い<sup>ねが</sup>も大きかったことが伝わってきます。

下の図②は、高地蔵<sup>たかじぞう</sup>のある場所を示した地図です。この地図から、吉野川では昔からよくこう水<sup>ずい</sup>があったことが読み取れます。吉野川のこう水<sup>ずい</sup>によって、藍<sup>やさい</sup>や米・野菜などの農作物にも被害<sup>ひがい</sup>がありました。

◀ ① 徳島市東黒田のうつむき地蔵  
〔『吉野川の語り部地蔵 高地蔵探訪 ガイドブック』より〕

▼ ② 高地蔵のある場所 〔『高地蔵探訪 ガイドブック』を参考に作成〕



- 1 藍住町乙瀬中田 2 藍住町の東中富龍池 3 徳島市東黒田 4 徳島市桜間 5 徳島市国府日開の法光寺前 6 徳島市国府日開の東  
7 徳島市国府和田居内 8 石井町藍町高畑 9 石井町東覚円 10 石井町高川原 11 石井町南島 12 石井町東高原  
13 石井町城ノ内南 14 石井町城ノ内西 15 吉野川市西麻植 16 吉野川市川島



## (2) こう水よる被害～大正元年こう水～

大正元年（1912）9月23日、台風の影響を受けて、吉野川で大きなこう水が起き、北島村（現在の北島町）のていぼうがあちらこちらでこわれ、家が水につかってしまいました。



▲ ③ 洪水で水につかった高さのしるし  
（北島町 三木安平氏宅）



▲ ④ 洪水で水につかった家の高さ  
（北島町 豊田延雄氏宅）

北島町では現在でも、大正元年こう水の被害の大きさを知ることのできる場所が残っています。写真③はこう水で水にうまった高さを示した柱です。地面から2 mのところしるしに印がきざまれ、当時のこの高さまで水につかったことがわかります。写真④は、民家に残るこう水のあとです。この民家では地面から2.3 mの高さ（赤い線の高さ）まで水につかりました。また、この民家のうらの水田は3.9 mの高さまで水につかったことが記録にのこっています。

吉野川は、わたしたちにめぐみを与えてくれる一方で、こう水によって命やざい産をうばってしまうきけんな面も持っているのです。そのため地いきの人びとは、昔からこう水を防いで生活を守るために、みんなで協力を続けてきました。





150年前に新見嘉次郎の  
つくったていぼうのあと

現在のがんしょうなていぼう

▲ ① 新見嘉次郎が作ったていぼう（北島町高房）



▲ ② 新見嘉次郎の石ひ（北島町鯛浜）

どのようにして  
ていぼうを築い  
たのだろうか。



住吉神社の中西宗一郎さんの話

鯛浜地区では、地いきの  
集会で新見嘉次郎さんの  
ことが話されていまし  
た。はたらき者の新見さ  
んが、地いきみんなで  
ていぼうを作るようにし  
てくれた。本人もあせやど  
ろにまみれて工事をいっ  
しょにがんばったそう  
です。

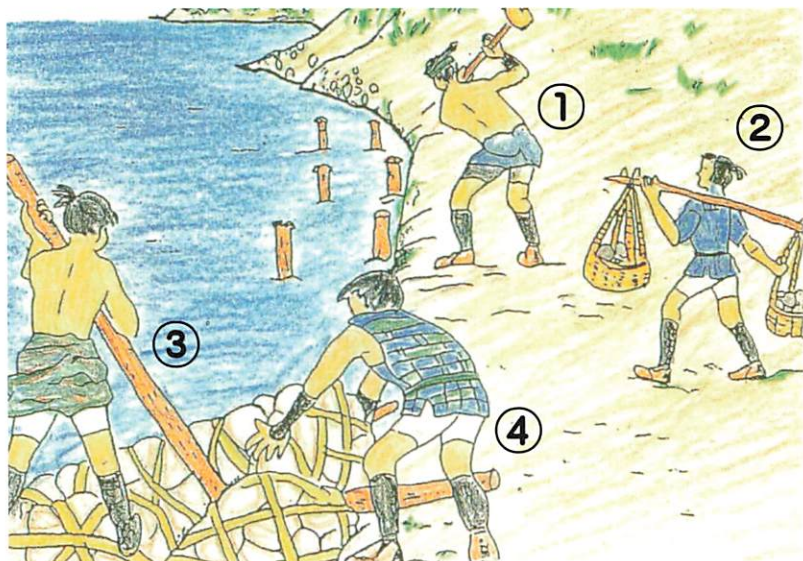
### （1）こう水を防ぐていぼう

写真①をみると、吉野川にそってまわりの水面より  
高くなっている場所（ていぼう）があります。このて  
いぼうは、およそ150年前につくられました。てい  
いぼうは、藍商人の**新見嘉次郎**が中心となり、村人  
が力を出し合って、約1年をかけて完成しました。

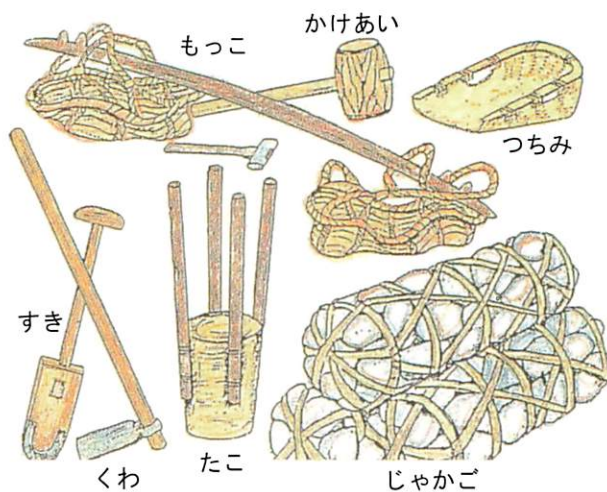
### （2）ていぼう工事

以前のていぼうは高さが低く、はばもせまいもので  
した。大雨になると、ていぼうがくずれ、村人たちは  
こう水によるさい害に苦しみました。新見嘉次郎は、  
村人の生活と藍の生産を守るために、大きなていぼう  
を作ることをてい案しました。なかには反対する人た  
ちもいましたが、嘉次郎の思いに動かされ、協力す  
ることになりました。





▲ ③ ていぼう工事のようす



▲ ④ 工事に使った道具（『わたしたちの北島町』より）

明治<sup>めいじ</sup>4年（1871）から、ていぼう工事が始まりました。上の図③にそのようすを示しました。①松の木の杭<sup>くい</sup>を打ち、それに竹や木をくくりつけて、垣<sup>かき</sup>のようなものをつくります。②そこにもっこ<sup>もっこ</sup>で運んできた土をもり上げていきます。③棒<sup>ぼう</sup>でたたきつけて、土を固<sup>かた</sup>めます。④川が曲がっているところは、特に強くしなければならぬので石を積んだり、石をつめたじゃかご<sup>じゃかご</sup>を川にしずめたりする工夫<sup>くふう</sup>をしました。そのころは、今のように進んだ技術<sup>ぎじゆつ</sup>や大きな機械<sup>きかい</sup>はなかったので、道具を使った手作業で工事を行いました。村びとたちは、朝早くから夜遅くまではたらきました。

### （3）ていぼう<sup>けん</sup>建せつにこめられた思い

こうして新見嘉次郎<sup>にいみ かじろう</sup>と村びとたちは、以前の4倍以上の大きなていぼうを完成させました。ていぼうが完成できたのはなぜでしょうか。それは村びとたちが嘉次郎<sup>かじろう</sup>を中心に、こう水を防ぎ<sup>ずい ふせ</sup>生活を守るという目標<sup>もくひょう</sup>に向かって、協力<sup>きょうりやく</sup>して作業したからです。その後、ていぼうはさらにがんじょうなものにつくりかえられ、現在の私たちの生活を守っています。いつまたこう水があるかわかりません。日ごろからこう水への備え<sup>ずい そな</sup>を心がけることが大切です。



あわあい  
阿波藍は、どこへ、どのようにして運ばれたのだろう。

どうして人や馬ではなく、船が使われたのだろう？



### (1) 阿波藍を運ぶ藍商人たち

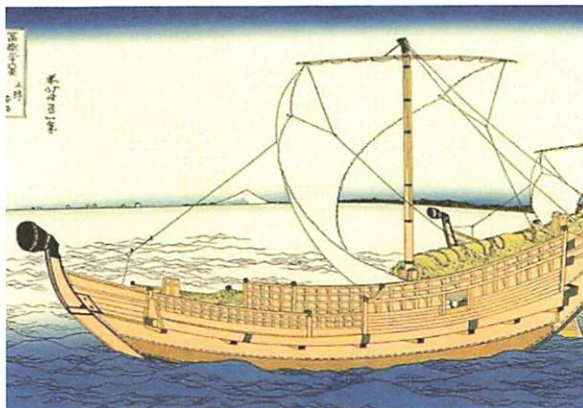
今から400年ほど前の江戸時代から、阿波国あわのくに（現在の徳島県げんざい）で藍あいの生産がさかんになりました。

そのころ、三木与吉郎家みきよきちろうけは、藍を生産者から集めて商売しょうばいを始めました。三木与吉郎家は、江戸えど（現在の東京）にも店をつくり、阿波藍あわあいの商売をしました。

藍は、たくさんの大きな荷物を一度に運ぶことができる船そうこを使って運ばれました。まず、倉庫そうこの近くにある船着き場から川船つに積み、吉野川よしのがわの河口まで運ばれます。さらに、海ぞいの港で大きな船つに積みかえられ、大阪おおさかへ運ばれました。藍は大阪から江戸ばい（東京）へと運ばれて、江戸の店でもはん売はんされました。



▲ ① 倉庫から川船に藍を積むようす  
（1ふくろは、およそ81kg）



▲ ② 江戸や大阪へ藍を運ぶ大きな船  
（全長18m はば5.8m 高さ5m）



▲ ③ 藍を運ぶ経路けいろ

どうして、2種類の船が使われたのかな？



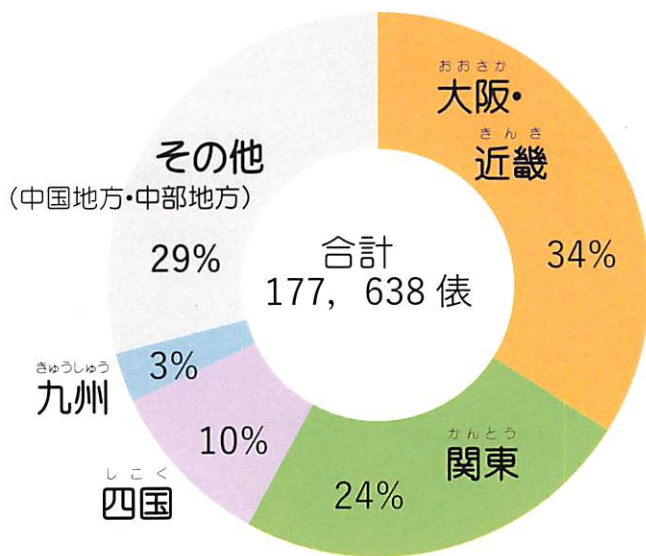
①は徳島県立博物館の展示より

②は『船』（ものと人間の文化史）より



## (2) 全国へ広まる阿波の藍

三木与吉郎家の他にも、たくさんの藍商人たちが、地いきごとに担当を決めて、大阪や江戸をはじめ全国各地に阿波藍を運んではん売していました。今から150年ほど前には、北海道や沖縄、台湾にまで阿波藍を運ぶ商人もあらわれました。染料として使われた阿波藍は、品質の良さから各地で多くの人びとに求められました。



▲ ④ 阿波藍が運ばれた地いきと量 (およそ150年前)

▲ ⑤ 藍を積んだ船が進んだ海の道

### コラム

#### 武州正藍染と阿波藍

埼玉県北部の武州正藍染は、今から約140年前の江戸時代に始まりました。農家の女の人たちが、家族の着る衣服を染めて作ったのが始まりとされています。はじめは阿波藍を用いて染めていました。その後、埼玉県でも藍を作るようになり、埼玉県は、徳島県に次いで第2位の藍生産量となりました。

現在は、ハンカチ、のれん、テーブルクロス、ワイシャツ、剣道着などの藍染めが作られています。その染めには、今でも阿波藍のすくもが多く使われています。



▲ ⑥ 藍染めの剣道着 (埼玉県羽生市HPより)



かくち  
各地へ広まった阿波藍  
あわあい  
は、どのように使われて  
いたのだろう。



### (1) 各地に生まれた藍染めの織物

木綿<sup>もめん</sup>の布は、とてもあざやかな藍色<sup>あいいろ</sup>に染まります。今からおよそ400年前から、日本で木綿がたくさん栽培されるようになりました。木綿は、はだざわりがよく、温かさ<sup>あたたか</sup>をたもち、汗などの水分<sup>いぶん</sup>をすうため、衣服として日本の気候<sup>きこう</sup>に適<sup>てき</sup>していました。衣服には、木綿以外にも麻<sup>あさ</sup>や絹<sup>きぬ</sup>など、さまざまな生地<sup>きじ</sup>があり、それぞれの地いきで藍染めの方法が工夫<sup>くふう</sup>されて織物<sup>おりもの</sup>になりました。

阿波藍<sup>あわあい</sup>は、各地で生まれた織物<sup>おりもの</sup>の文化をささえていました。これらの織物は、伝統工<sup>でんとうこう</sup>芸品<sup>げいひん</sup>として現在<sup>げんざい</sup>に伝わっています。



② 九州の久留米かすりを織るようす  
(久留米かすり協同組合 HP より)

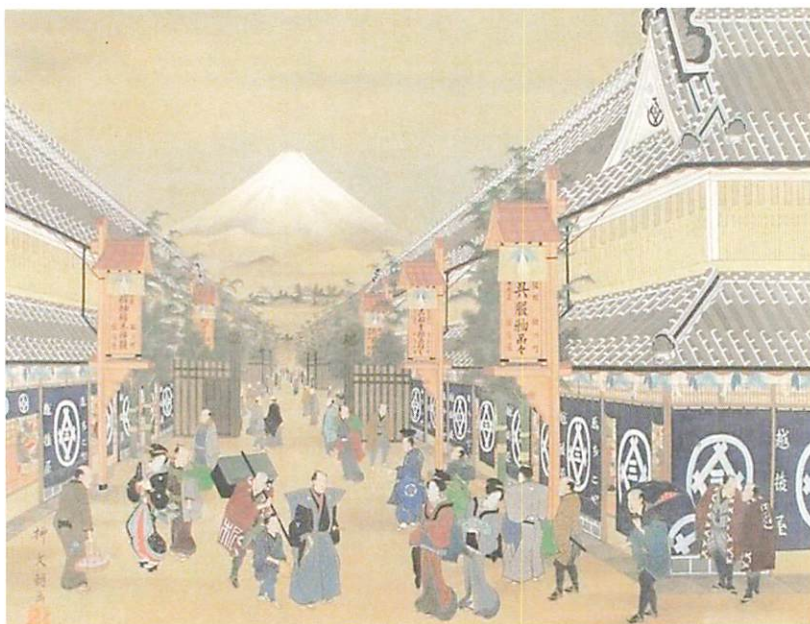


## (2) 庶民に親しまれる阿波の藍

藍で染められた織物はさまざまな品物にすがたを変えました。今から200年前の江戸時代にかかれた絵を見ると(図③)、庶民が着ている衣服の多くが、藍色に染められていることがわかります。他にも、ふとんや蚊帳(ねる時に蚊をふせぐためにつり下げて寝床をおおうもの)、店ののれんや農民や商人が使う前かけ、荷物を入れるふろしきなどが藍で染められました。色の美しさと、殺菌や虫よけの効果をもつ阿波藍は、庶民の日常生活に欠かせないものとして、日本中の多くの人びとや町を藍色に染めました(図④)。



▲ ③ 歌川広重「東海道五十三次」  
藍染めの着物(有松しほり)を売る店



▲ ④ 江戸の町中にひろがる藍色(駿河町越後屋正月風景図より)

### コラム

#### 文化の交流

藍を全国にとどけた後、藍商人たちは、空になった船にその地域の特産物や藍づくりに必要な肥料を積んで、徳島に帰ってきました。その時、さつまいもが九州地方からはじめて徳島にとどけられました。その後、徳島の土にあったさつまいもに改良され、徳島を代表する特産物「さつまいも(鳴門金時)」が生まれました。







なぜ藍商人は、地  
いきの神社を支え  
たのだろう。

### (1) 身の周りの文化財

わたしたちの周りには、さまざまな文化財があります。  
それはその土地の自然であったり、伝統工芸、いせき、  
神社や寺で行われる祭りや行事です。

### (2) 地いきの中の神社

どこの地いきにも神社があります。自分が住む地区  
の神社をさがしてみてください。祈りの対象であり、  
今でも人びとが集まって、祭りや年中行事を行っています。  
昔はけい馬やすもうなども行われていました。人び  
とは秋になると、農作物の実りや豊漁を祈ったり、祭  
りを楽しんで仕事のつかれをいやしたりしました。

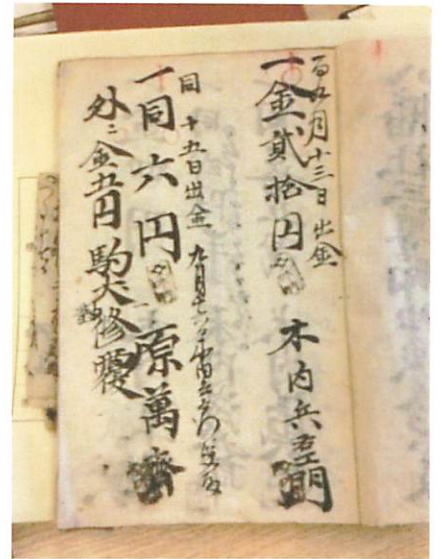
私たちの地いきに  
は、どんな文化財  
があるのかな？





### (3) 神社と藍商人

地いきの人びとは、神社でさまざまなことを祈り、祭りや行事を通して結びつきを強めていました。みんなで少しずつ費用を出し合って、祭りや行事、しせつを守ってきました。とくに藍商人はたくさんの奉納物をきふしていました。藍商人たちは、地いきへの感謝の気持ちがあり、商売はんじょうの祈りとともに、地いきを大切にするために神社を支えていました。



▲ ② 神社へのきふの記録  
右側の「木内兵右門」は藍商人で、多くのお金をきふしていました。

### (4) 神社を受けつぐ

神社は地いきの人びとの歴史を伝える場所であり、人びとの思いや努力によって受けつがれてきました。たとえば、北島町にある水神社は水害から地いきを守るためにつくられ、今でも祭りが行われています。現在も続いている神社の行事は、数多くあります。行事の時に人びとが集まることで、地いきの結びつきが強まります。神社は昔も今も、人びとが集い、地いきの支え合いを象ちょうする場となっています。



▲ ③ 三木与吉郎家が神社に奉納した石どうろう

## コラム

### 昔の生活のようすを知るための記録文書

北島町立図書館の2階には、昔の記録文書が数多く保存されています。その記録文書を集めたのは、三木安平さんです。わたしたちは、それらの記録文書から、北島町や徳島県の昔の生活のようす（歴史）を知ることができます。こうした記録文書も大切な文化財です。



▲ ④ 北島町立図書館





▲ ① 人形浄瑠璃のようす [ 人形浄瑠璃は三味線をひく人とその音に合わせて物語の台本を読む太夫、人形をセリフに合わせてあやつる人形つかいに分かれてえんじます。 ]

徳島県の文化は、どのように発てんしてきたのだろう。

### (1) 人形浄瑠璃

人形浄瑠璃は、今からおよそ400年前に淡路島で始まったとされています。その後、徳島県でさかんになり、現在に伝わる伝統的な文化となりました。

### (2) 人形浄瑠璃の発てん

人形浄瑠璃は、わたしたちの地いきで、今から250年ほど前（江戸時代）に広まりました。当時は、藍がさかんに栽培され、藍商人たちが大きな力をもっていました。藍商人たちは、地いきの祭りや行事のある時に、人びとがより農作業にはげめるように、地いきで人形浄瑠璃を開きました。人びとにとっては、生活の中の楽しみとなりました。



あわじゅうろうべ えやしき  
阿波十郎兵衛屋敷

徳島市川内町には人形浄瑠璃の伝統を守り、伝えていくために、多くの人が実際の人形にふれたり、人形浄瑠璃の上演を見たりすることのできる施設があります。それが「阿波十郎兵衛屋敷」です。スタッフの方にインタビューしてみると、伝統文化として人形浄瑠璃を受けつぐ思いを聞くことができました。



▲ ② 阿波十郎兵衛屋敷

人形浄瑠璃は、受けついでくれる人が少なくなり、昔に比べて盛んではなくなりました。私たちは小学校に出前授業に行ったり、吉野川と藍とコラボレーションした人形浄瑠璃ツアーを考えたりして、人形浄瑠璃をみんなに知ってもらう努力をしています。課題はたくさんありますが、徳島県のすばらしい伝統文化を残していきたいです。



阿波十郎兵衛屋敷のスタッフ

あわおど  
(3) 阿波踊り

毎年8月に行われる阿波踊りは、400年の歴史をもつ、徳島県を代表する祭りです。地元の人たちが自分たちで音楽をかなでて、踊れることもあり、藍商人がお客さんをもてなすときにも踊られていました。このように、みんなが参加できる阿波踊りは、地いきの人たちの楽しみとなって、現在まで続く伝統行事となりました。

今では、阿波踊りを見にたくさんの人びとが毎年、徳島県にやってきます。また、阿波踊りは、日本全国に広がり、埼玉県越谷市や東京都杉並区高円寺など、いろいろな土地で踊られるようになっていきます。



▲ ③ 埼玉県越谷市の阿波踊りのようす  
(越谷市 HP より)



あわあい  
阿波藍のかかえる

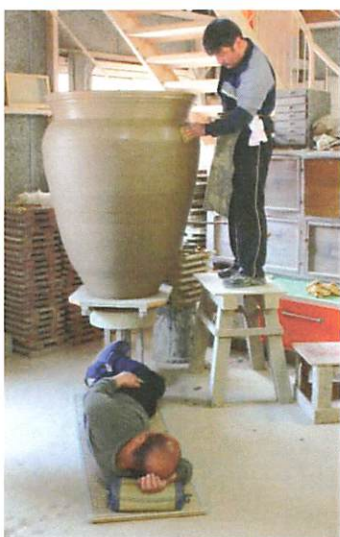
かだい  
課題は何だろう。

### コラム

#### おおたにやき 大谷焼

大谷焼は、約230年の歴史がある徳島県を代表する陶器です。人の身長と同じくらいの大きさのかめを作る時は、2人で作業します。1人が作業台の下で足でロクロを回し、もう1人が形を作ります。

最近は、大きなものだけでなく、茶わんやマグカップなどの日用品も作られています。



▲ ① 大谷焼の藍がめ(ねろくろ)

### (1) 阿波藍のかかえる課題

あい 藍の生産から、藍の商品をはん売するまでには、多くの人がかかわっています。そうした人々は、どのようななやみをかかえているのでしょうか。

#### そめし 〇染師の竹内良子さん



染めたい人はたくさんいるのに、すくもが不足しています。昔から伝わってきた方法で、あざやかな藍色に染めることがむずかしくなってきました。わたしは、昔ながらの阿波の藍の色を守りたいです。

#### あいのうか 〇藍農家の人たち



昔とくらべて、藍を栽培する農家が少なくなってきました。阿波の藍の色を出すためには、徳島県で作ったすくもが必要なため、藍を栽培する農家がふえてほしいです。

#### 〇藍がめを作っている大西義浩さん



げんざい おおたにやき あい  
現在、大谷焼で藍がめを作っているのは、2軒しかありません。藍がめを作るためには、たくさんの時間がかかり、力仕事でもあります。藍がめを作り続けていくために、わかい人に技術を伝えていきたいです。



## (2) 少なくなる<sup>あい</sup>藍生産

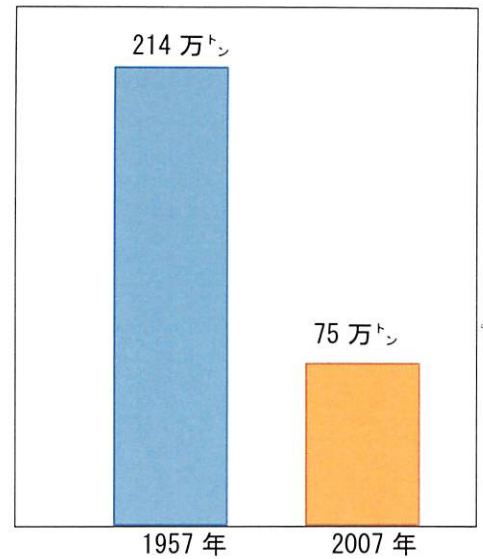
藍色は、現在「<sup>げんざい</sup>ジャパブルー」として世界に知られる日本を代表する色となっています。

同じ藍色でも阿波藍<sup>あわあい</sup>で染めると、深みのあるあざやかな色が出るため注目が集まっています。

阿波藍<sup>あわあい</sup>を使って染めたいという人たちはたくさんいます。しかし、染料<sup>せんりょう</sup>を手に入れることがむずかしくなっています。

徳島県で作られる藍<sup>あい</sup>の生産量は、昔にくらべてかなり少なくなりました(図②)。その原因は、藍を作る農家が少なくなったためです。

藍<sup>のうさくもつ</sup>はほかの農作物にくらべてねだんが安く、藍を作っても利えきが得られません。そのため、すくもの生産量がへっています。こうした課題<sup>かだい</sup>を抱えているため、阿波藍を広めていくこと、伝えていくことがむずかしくなっています。



▲ ② 藍の生産量のへんか



藍  
=3000 円/ha



レンコン  
=5310 円/ha

▲ ③ 藍とレンコンの同じ面積あたりのねだん

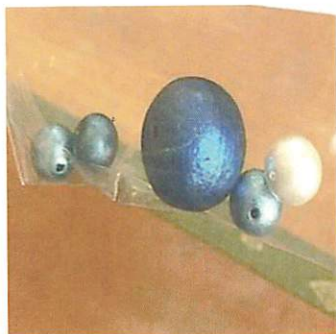
## (3) 課題<sup>かだい</sup>の<sup>かい</sup>決<sup>けつ</sup>に向けて～市町村・地いきの取り組み～

阿波藍<sup>あわあい</sup>を広め、今後に伝えていくことに対してさまざまな取り組みが見られます。市町村では、都市部から「<sup>きょうりょくたい</sup>地いきおこし協力隊<sup>しゅう</sup>」をば集<sup>あつ</sup>めています。<sup>きょうりょくたいいん</sup>協力隊員としてやって来た人は、しえんを受けながら、藍<sup>さいばい</sup>の栽培から新<sup>しやうひん</sup>商品の開発まで、さまざまな活動を行っています。また、県や市町村では、しょうがい者が農業に<sup>ふくし</sup>取り組み自立するしえんをしています。北島町の福祉施設<sup>せつ</sup>「ちゅうりっぷ」では、藍<sup>あい</sup>の栽培や藍パウダー<sup>さいばい</sup>を使った食品<sup>しょくひん</sup>づくりを行っています。



④ 藍のパウダー ➤





① 藍で染めたパール



② 藍で染めたジーンズ



⑤ 藍を入れたビスコッティ



③ 藍色のテディベア



④ しじら織と藍のシャツ

新しい かつよう  
新たな藍の活用の方法を考  
てみよう。

## コラム

### 藍が病気を予防する？

昔、武士はよろいの下に藍染めのはだ着を身につけていました。藍葉には、止血、きず・虫さされの炎症をおさえる、熱を下げる、毒をけすなどたくさん効果があります。また、殺菌・消臭などにも効果があるとされ、今では藍の成分を入れた石けんなども作られています。

▽ 藍のお茶



### (1) 新たな活用の動き

伝統的な阿波藍や藍染めを伝えたり、広めたりする一方で、今までにはない新しい考えをもとに藍の活用を進める人たちもいます。

現在、そのような人たちの多くは、「わかい人たちが関心をもち、気軽に使用できるもの」の製作をめざしています。その一つが、ふだん身につける品物（アクセサリーやジーンズ、インテリア品など）を藍染めすることです。また、食用として藍の粉や成分を入れた品物も多く作られています。藍には、さまざまな病気の予防になるケンペロールという成分が、ほうれん草の10倍もふくまれています。



## (2) 藍あいの活用を考えよう！

徳島県では、さまざまな分野の人たちが藍あいの持つ効果こうかを研究し、人びとの生活に役立つ使い方や、品物を作り出しています。

藍ぬのは布そを染めるだけにとどまらず、昔からその時代の生活のスタイルに合わせて、いろいろな使い道うが生みだされてきました。

わたしたちも、生活に役立つ新しい藍あいの活用方法ほうほうを考えてみましょう。

	効果 <small>こうか</small>	活用の仕方
昔 <small>むかし</small> の活用	虫よけ	のれん
	きずを治す	はだ着
	はだあれ	衣服
現在の活用	栄養がある	食品
	体を守る	衣服
	清けつ <small>(殺菌)</small>	石けん

▲ ⑥ 藍のもつ効果と活用

### みんなで考えてみよう！

【絵】

地いきの中にこまっている人がいます。  
藍を使った商品を作って、助けてあげよう！

自然しぜんのものを使った、健康けんこうにいい食事がしたいです。



子どものはだあれを、自然しぜんのもので清けつきんこうに保ちたい。



色のきれいなインテリアがほしい！



藍あいを使ったものを持ち歩きたいな。



【使い方や商品のしょうかい】

---



---



---



---



## 編集後記

徳島県での調査を経て、藍染めの伝統的な工法を続けて広めようとしている方がたくさんいて、藍染めをするときの笑顔や真剣な様子、藍を育て続ける誇りなど、文化を守ろうとする方々の思いや熱意を感じました。この副読本が少しでも未来へ伝統を残していく力の助けになれば幸いです。(市岡 千歩)

私は今回の調査で藍を建てるところから染めるところまでを中心的に調査しましたが、藍作農家の佐藤さんや藍染職人の竹内さんのお話を聞いて徳島の藍の品質や色の良さや染めの繊細な技術を間近で感じることができました。藍産業における現場の声や様子、伝統的な工法などをまとめた本教材が地域の伝統的産業の学習に少しでも役立てると嬉しいです。(上村 健太)

私が担当したのは「吉野川の洪水」、「新見嘉次郎」の部分です。児童にとって、身近な物から関心・意欲を持つことができる教材を目指しました。「高地蔵」や「堤防跡」を導入に用いたところが工夫した点です。私は徳島の調査で、吉野川沿いを歩いたり、走ったりしました。その時に「高地蔵」、「堤防跡」を目にして抱いた好奇心を、児童にも感じてもらうことができれば嬉しいです。(三井 大輔)

「海？」実家は群馬県、現在は大学のある埼玉県にいます。海は見慣れていないためか、徳島県に来て初めて吉野川を見たとき、その青さと広さに、勘違いしてしまいました。吉野川については、事前に調べています。しかし、本やインターネットの写真を見たときにはなかった感動がありました。それだけでも、来てよかったと思いました。自分の目で見る、自分の肌で感じる、人と話してみる。新たな楽しさ、感動、驚き、発見がありそうです。(矢野 絹子)

阿波藍に関する調査から、副読本の完成まで約1年間。学生時代にこのような経験ができたこと、非常に嬉しく思います。徳島県での調査活動では、多くの方々から貴重なお話を聞くことができました。その折には、我々学生の調査活動にご協力頂いたことに感謝します。この1冊の副読本が地域の発展に結びつくことをお祈り申し上げます。(梅澤 理奈)

現地で藍の知識を調達する以上に、副読本にその知識をまとめるのは、とても大変な作業でした。しかし、現地で学んだ知識が教材として、形になるのは大変うれしいです。この藍の学習を通して、地域に誇りを持った徳島の児童が育つことを願っています。(木島 健介)

暑い日差しの中、汗をかきながら自分の足で情報を稼ぎ、なかなか思うような情報が得られない歯がゆさと、別々に得られた情報たちが繋がったとき、求めていた情報が得られたときの達成感を非常に感じる事ができた徳島調査でした。何か1つのことを証明するためにはこんなにも労力が必要なのかと驚かされました。それとともに、好奇心や探究心などが湧いてきて、童心にかえって小学生の頃のように夢中になって調査に取り組んでいました。楽しかったです。調査にご協力いただきました関係者の方や施設の方には深く感謝しております。ありがとうございました。(柳 玉姫)

今回副読本を作るにあたって徳島県の方々の温かさに触れることができました。調査する中で協力していただいた方々にとっても感謝しています。調査を通して、藍に携わる方々の藍に対する強い思いを感じました。その思いが少しでもこの副読本を通して子どもたちに伝えられたらうれしいです。(小川 遥香)



今回の調査で、阿波藍が抱えている問題やそれに対して様々な人たちが阿波藍を残し、その良さを知ってもらおうと取り組みを行っていることが分かりました。副読本作りでは、阿波藍の今をどのように子供たちに伝え、考えてもらうかを意識しながら、作成していました。子供たちに自分の地域の伝統である藍について少しでも考えてもらえたらうれしいです。(高橋 勇磨)

私は藍と地域文化のかかわりというところを中心に調査をしました。神社やお寺には様々な歴史が残っていて、実際に足を運んでみることでたくさんを知ることができました。人形浄瑠璃については、調査を進めていくうちに藍とのつながりが見えてきて、感動したことが印象に残っています。現地で感じたことや学んだことを、副読本を通してどのように伝えるか、考え続けました。徳島県の藍の歴史と文化を知り、その伝統を大切にしていってほしいなと願っています。

最後になりますが、この副読本の作成に際し、様々な人々や施設に協力していただきました。私たちが快く受け入れてくださり、調査に協力して下さった方々に、心から感謝いたします。(山田 健太)

## 【参考文献 (主なもの)】

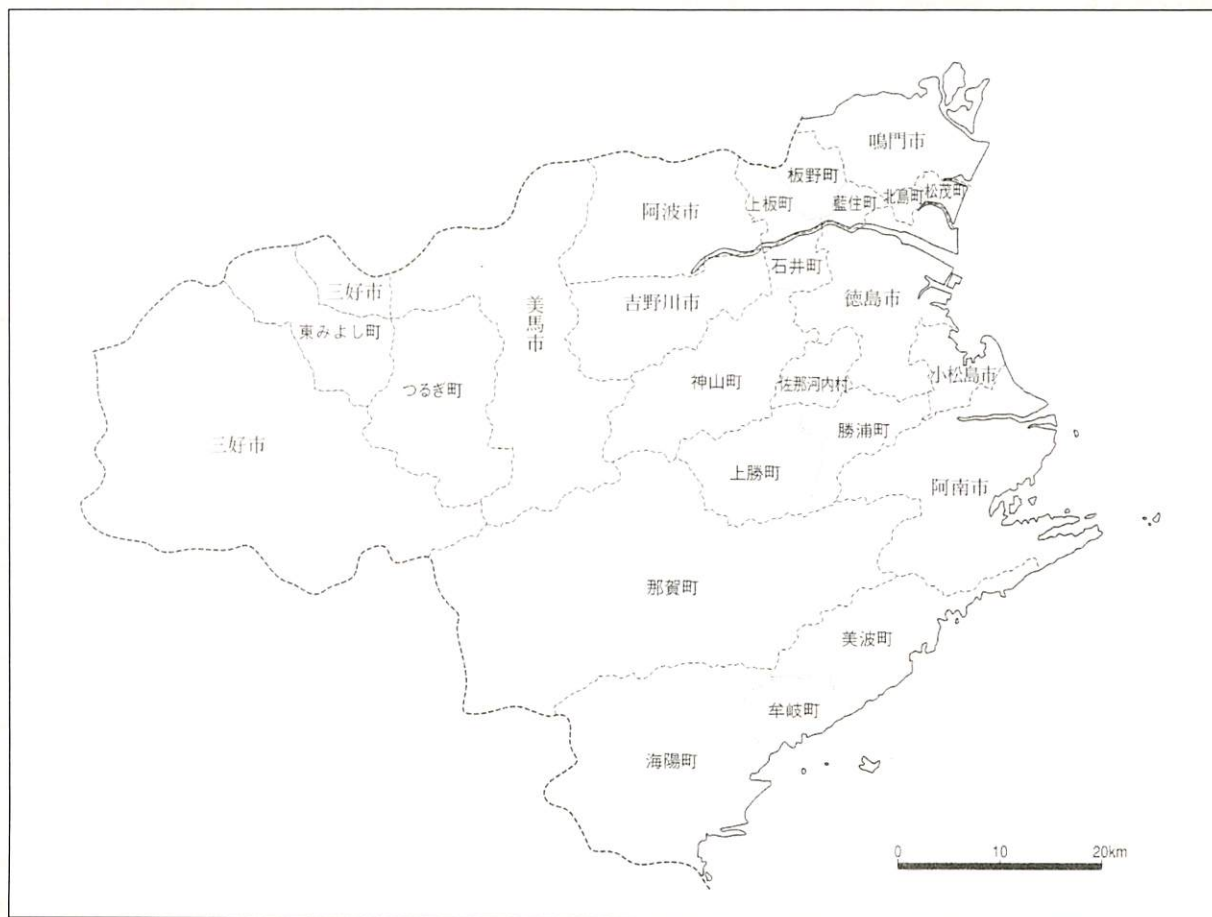
『風そよぐー平家・徳島落人伝説』荒井賢治, 日経 BP 出版センター, 2002年 / 『吉野川の語り部地蔵高地蔵探訪ガイドブック』国土交通省徳島河川国道事務所, 1998年 / 『藍より青きよしのがわ』建設省徳島工事事務所, 1995年  
成7年 / 『わたしたちの北島町』北島町学校教育研究会小学校社会科副読本編集委員会, 2005年3月 / 『藍染の表象』庄武憲子, 原田印刷, 2010年5月 / 『日本の藍～伝承と創造～』日本藍染文化協会編, 日本放送出版協会, 2002年5月 / 『「伝統と文化」に関する教育課程の編成と授業実践』安部崇慶・中村哲, 風間書房, 2012年4月 / 『地元の文化力～地域の未来のつくりかた』苅谷剛彦, 河出書房新社, 2014年9月 / 『岩波講座 歌舞伎・文楽』第10巻(今日の文楽), 鳥越文蔵ほか, 岩波書店, 1997年12月 / 『文楽ハンドブック』藤田洋, 三省堂, 1994年11月 / 『江戸時代 人づくり風土記 36・徳島』石川松太郎, 農山漁村文化協会, 1996年10月 / 『阿波藍経済史研究～近代移行期の産業と経済発展』天野雅敏, 吉川弘文館, 1986年12月 / 『阿波藍譜(栽培製造篇)』三木与吉郎, 三木産業, 1960年 / 『阿波藍譜(史話図説篇)』三木与吉郎, 三木産業, 1961年 / 『阿波藍の栽培及製法』三木与吉郎, 三木産業, 1960年 / 『阿波藍に関する諸統計』三木与吉郎, 三木産業, 1961年 / 『阿波藍沿革史』西野嘉右衛門, 思文閣, 1971年 / 『図説 徳島県の歴史』三好昭一郎, 河出書房新社, 1994年11月 / 『生業から見る地域社会～たくましき人々(阿波・歴史と民衆)』徳島地方史研究会, 教育出版センター, 2011年3月 / 『藍住町史』藍住町, 1965年 / 『北島町史』北島町, 1975年3月 / 『北島町史・続編』北島町, 2018年3月 / 『松茂町誌(上巻・中巻・下巻・続編・続編第2巻・続編第3巻)』松茂町, 1975年～2011年 / 『藍 I (風土が生んだ色)』『藍 II (暮らしが育てた色)』竹内淳子, 法政大学出版局, 1991年・1999年 / 『宮本常一とあるいた昭和の日本 21(織物と染物)』宮本千晴, 農山漁村文化協会, 2011年9月 / 『藍が来た道』村上道太郎, 新潮社, 1989年10月 / 『藍染の絵本』山崎和樹, 農山漁村文化協会, 2008年4月 / 『アイの絵本』仁科幸子, 農山漁村文化協会, 1999年4月 / 『日本の藍～一染織の美と伝統』日本藍染文化協会, 日本放送出版協会, 1994年3月 / 『徳島藩の史的構造』三好昭一郎, 名著出版, 1975年 / 『板野郡誌』上巻・下巻, 板野郡教育会編, 名著出版, 1972年 / 『徳島県の歴史散歩』歴史散歩編集委員会, 山川出版社, 2009年7月 / 『徳島発展の歴史的基盤』地方史研究協議会編, 雄山閣, 2018年10月 / 『総合学術調査報告・北島町(阿波学会紀要・第42号)』阿波学会編, 徳島県立図書館, 1996年3月 / 『総合学術調査報告・藍住町(阿波学会紀要・第52号)』阿波学会編, 阿波学会, 2006年7月 / 『日本の藍～染織の美と伝統～』日本藍染文化協会編, 日本放送出版協会, 1994年3月 /



## 【徳島県の主要な文化財】(県の歴史・伝統的な生活文化・自然に関して小学校で取り上げてもらいたいもの)

- ① 藍染関連「奥村家住宅・阿波藍栽培加工用具」(藍住町歴史館藍の館)
- ② 阿波の太布紡織習俗
- ③ 和三盆「阿波の和三盆製造用具」(松茂町・社団法人三木文庫)
- ④ 製塩「福永家住宅」(鳴門市)「鳴門の製塩用具」(徳島県立博物館保管)
- ⑤ 大谷焼「大谷焼登窯」(鳴門市)
- ⑥ 阿波手漉き和紙製造の技法(技法保持者:吉野川市 藤森洋一氏)
- ⑦ 阿波の人形芝居(阿波人形浄瑠璃振興会)  
阿波人形師(天狗屋)の製作用具及び製品(徳島市 天狗久資料館)
- ⑧ 箱回しの門付「阿波木偶の門付け用具」(徳島市 阿波木偶箱まわし保存会)
- ⑨ 西祖谷の神代祭り(三好市西祖谷山村)
- ⑩ 山村集落・三好市東祖谷山村落合(伝統的建造物群)
- ⑪ 商家町・美馬市脇町南町(伝統的建造物群)
- ⑫ 漁村集落・牟岐町出羽島(伝統的建造物群ほか)
- ⑬ 阿波遍路道(名西郡神山町、小松島市、勝浦郡勝浦町、阿南市、三好市)
- ⑭ ドイツ人捕虜関連・板東俘虜収容所跡(鳴門市)
- ⑮ 勝瑞城館跡(藍住町)
- ⑯ 徳島城跡(徳島市)
- ⑰ 船舶「徳島藩御召鯨船千山丸」(徳島市立徳島城博物館)
- ⑱ 阿波の土柱(阿波市)
- ⑲ 大浜海岸のウミガメおよびその産卵地(美波町)
- ⑳ 鳴門の名勝(鳴門市)

## 【徳島県の白地図】





- 編著 六本木健志      ■ 監修 村田三恵
- 各項の編集執筆担当（文教大学教育学部社会専修 2018年度3年次生）
- 藍染めを体験してみよう（市岡千歩・上村健太）
- 1 染めのようすをのぞいてみよう（市岡千歩・上村健太）
  - 2 藍はどのようにしてつくられるの？（市岡千歩・上村健太）
  - 3 吉野川のめぐみー昔と今ー（三井大輔・矢野絹子）
  - 4 吉野川のこう水とわたしたちの暮らし（三井大輔・矢野絹子）
  - 5 地いきの発てんにつくした新見嘉次郎（三井大輔・矢野絹子）
  - 6 全国へ運ばれた藍（梅澤理奈・木島健介）
  - 7 各地に生まれた藍染めの織物（梅澤理奈・木島健介）
  - 8 藍商人と地いき文化のつながり（山田健太・柳玉姫）
  - 9 受けつがれる伝統文化ー人形浄瑠璃・阿波踊りー（山田健太・柳玉姫）
  - 10 阿波藍のかかえる課題（小川遙香・高橋勇磨）
  - 11 阿波藍の新たな活用（小川遙香・高橋勇磨）



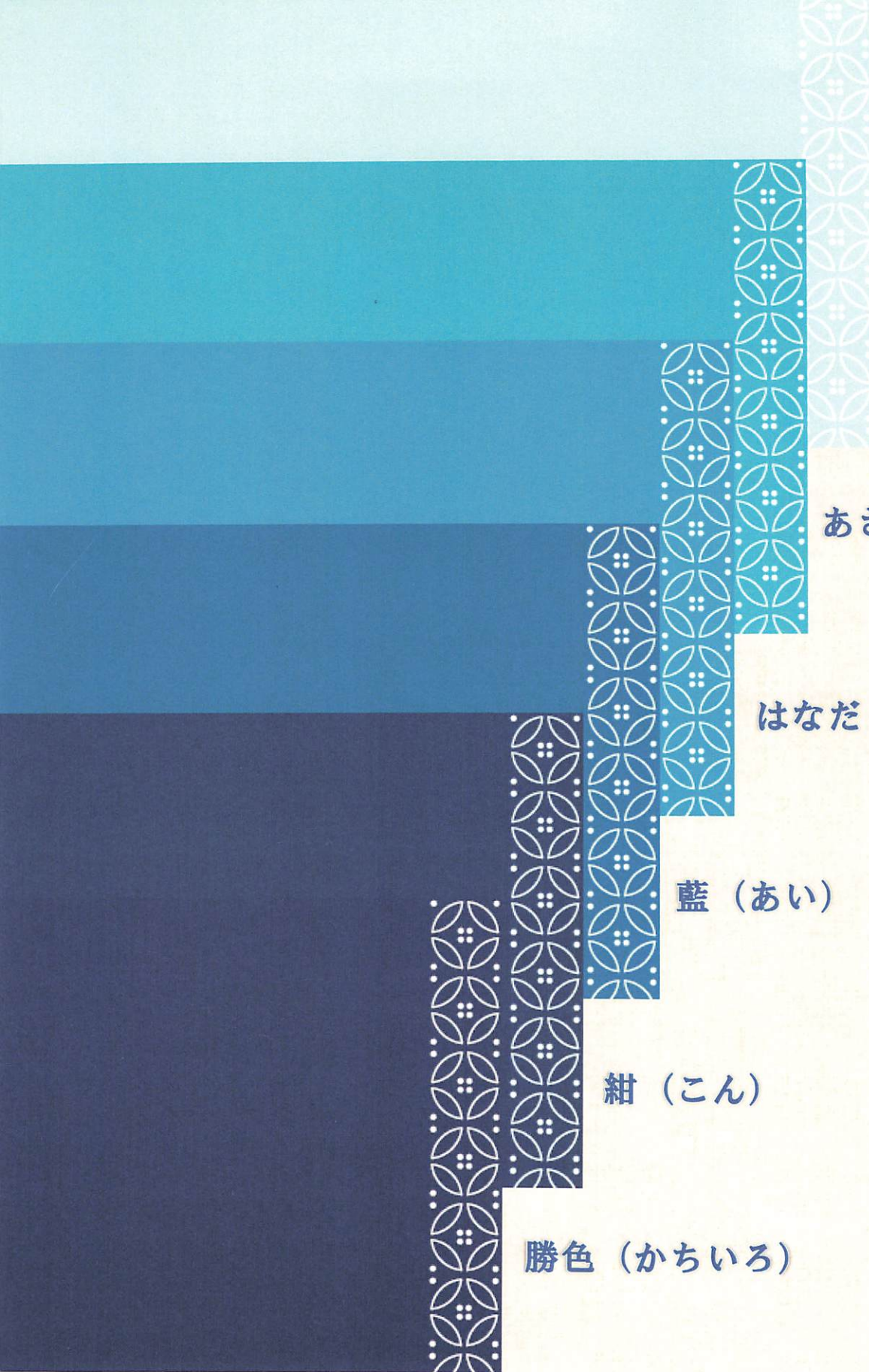
小学校4年 社会（県の学習）  
 受けつがれる伝統・文化と先人のはたらき  
 （徳島県の阿波藍）

2019年2月 印刷・発行

作成者 文教大学教育学部社会専修  
 六本木健志

〒343-8511  
 埼玉県越谷市南荻島 3337  
 文教大学教育学部社会科研究室  
 TEL 048 (974) 8933 直通





かめのぞき

あさぎ

はなだ

藍 (あい)

紺 (こん)

勝色 (かちいろ)

染めの回数や時間で多様な色合いを見せる藍の奥深さ